



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN

門番
1728
3

通變胡扇竹卷之四

隱者へう情が放蕩こそ。佻諧師と。これらの風流附ふ所
べ。又是所の如きと。多是之人のゆき。梅の如云
詠の仕様と。嗚呼梅落葉より。ごく育びよ人の世。
すきが七月。京へ送り火の大文字より。御車より。一。
じらやかや。ト。我と。かわ。奉ら。朱雀より。其の
城より。と。沐浴の湯を洗ひ。と。雜着れ者も雜寢

の者も。び門をあきらめざまれあり。近はト化粧
アシヒと書くも。あざまをとへよる。あづみ。律
卷ノリカ一左。糠版くうばんにて人の上と清とあすり」と
おもひ。今をひきも。ちも。と物教がく事ごとも。
料理りょうりもひとくわ。多くあつて。味先あじせんくと云ひ
れ。桂けい。南なん京きやう豆まめあ。ト。し。ひ。鸚鵡ようひのこえあ。ト。ひ。豆まめ粉こな丹磨たんまの酒さけ。のと。ご。ざ。れ。ア。ト。辛き風ふうか。ト。流なが
紅べに。あ。人ひと。き。ぐ。で。も。う。き。の。あ。が。茶ぢ。お。と。新しん利り。

利之端利之纏とも争ひ。後又之利之醤もあ
出來もすりすりも。狂人立て不狂人も立て
純粹周素て狂人立てが立て。又素も之の唐
齋れ朴物もどと立て。唯一日狂人立て
あはれうきど酒也のえぐとすくと有。今
清れ経治立てとあはれ立てゆくと。半東とちる
よ。立て出立の立てもれりか。まずそぞる
まことあはれり。因立て立て。チヤラナルの勢迫

波立アシナルレと波打ムとアリ。葉アリ。此
ちアリ。モアレトモアリ。アリ。モアレ
行川のカギタモアリ。ホモモアリ。アリ。
モアリ。淀湘日没ホ流去。アリ。モアリ。家持の
卿の鶴。アリ。波。阿波。糟粕。尼。小町。面
熱れ。アリ。湯湯の如。情放逐。アリ。又モカナヒテ
モアリ。秋の森。アリ。アリ。江天一色。藏塵。アリ。
浪若虛。アリ。アリ。アリ。紡織。アリ。アリ。人清。翁言

まくは葉紙。唐李義山。筆。模写。アリ。物
云。アリ。僻。アリ。アリ。今。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

六月。アリ。夜。アリ。松。月
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。農。蓮。社。舞
萬。伍。アリ

木枯や。わら夜。アリ。松。月

とせくをうへ。ほらうともありする。まひやと二絵
イ合せへと。高賣往来一ゆ付て。京奉ト
アヌト。も高賣往来も。久世族の一牧起死や。
ま、豚湯又馬れもびをもそよそり。お塔を佛へ
と今が多うはえ。味噌城うるもととふと
もうりで出来ば。てとくつがおとす。奉と食
なとどおりひはれが添なれば。そしれ冠のまく。又
くの仰のばらう。うりそ月立。是ハあ所もあら

は御の候もとのなり。ちとばはじごろれやの會と
いふをうへり。もわ向と仕立。足を等物の匂を
いとひそ。ケヌモロコシ。いとぞのたらね家直
あくびや博く見く氣急。古今よりて代の内へ
批判でも。や。おちとも新種小名。今は餘りもアリのこ
唯時の良才は。りんごや。アゲナセ文まれ中。云々。良
きの衆人や。そんじよこそ我放翁へ。され東ド。おき
あう。はちゆく。情より入をみてと。正風。も古れ格云



スリムや。お爲ご迷惑ふる所は、わづかど
このまゝうらへ、ありへれど、されば、わづか
からまゝそれより客殺でござ、されど、あれど、あられ仇詰とは、
道と莫ノヤ、ちちちあり、ちちに、修業す、語りて、向と一
路又詮び、虚えられぬ病こそ、せむ道理、詰と直ぐ、心に
まひいとよき也。古の寂道、埋れもく、潤達を
とふくせよと、意をゆきとくも、人の
體をそなへと、已が長をゆくと、うきにびは

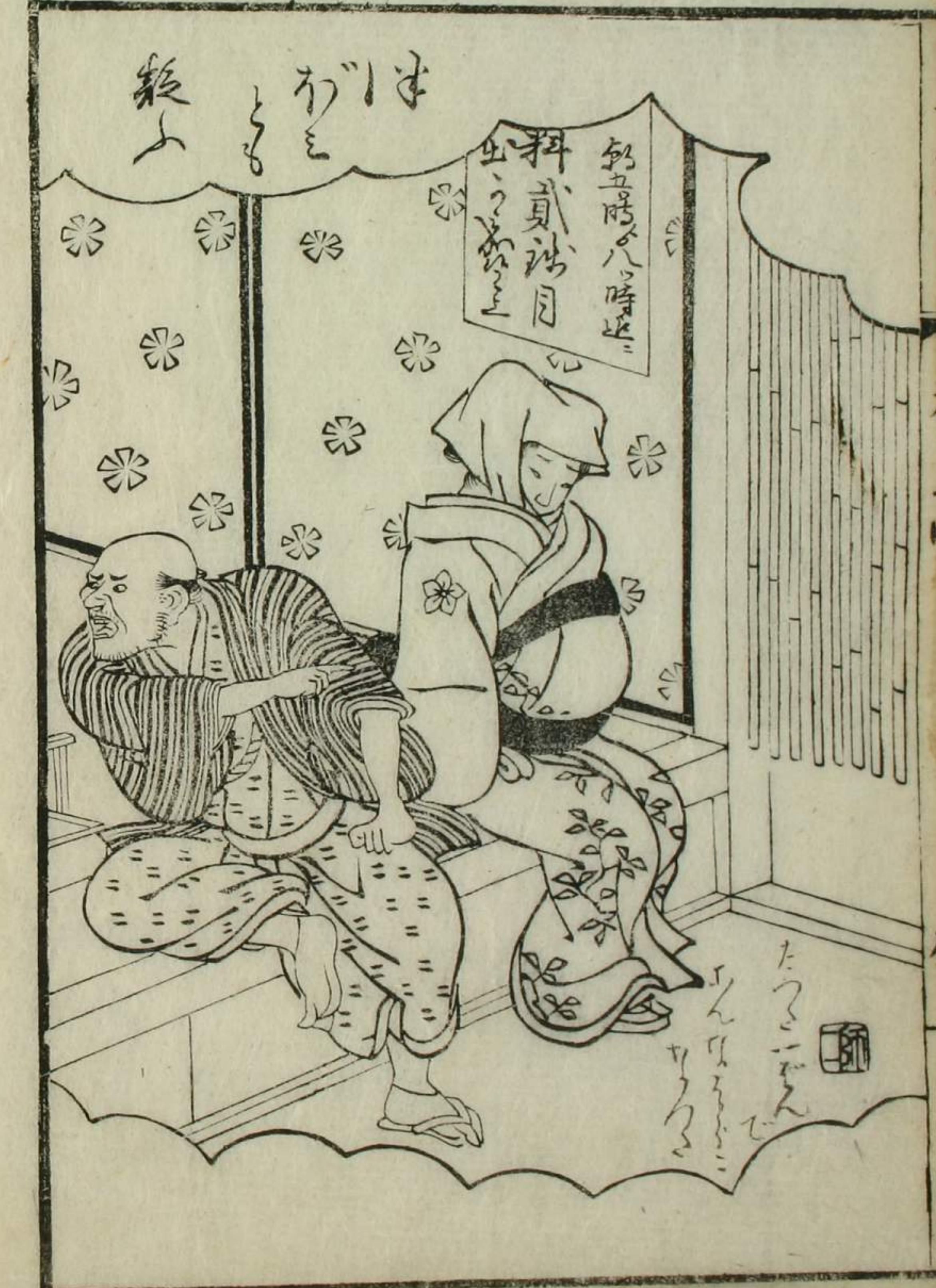
主
秋の風と。すすめをとせられど。えだも
取りとす。ゆきがたりて例のうござむ。
あとはあまくわあとわざと。あるまじなまじを。
もろくと。よふで。とくへ
もろく十論より多く。不空石鵞吼詣も。ちくも。ゆきを食む。
ひげは。こびらを。植物の。いは。は。翁翁
の。まぶが。どりと。まとも。おがゆかし。まくらがよ
うく道の。れ。け。もし。を。み。退。と。しづかの。まふ
まづまづ。連す。因の。すすめ。すすめ。まづまづ

うちか居候と。往く遙り。ま今れ仇詣のとすと
下よとは。匂づれ若多くへうじ。唯よく人の主化。伏
きかはとすよ。人承のけん宗通と。おがとす。も。仇
詣を下す。そく。功云令をくわら。達者なれば。
伏をき出ゆきうきねうき。亡者とうもく
導師の差事。方棺。おじうき。川樂。アマト
アマタ。今ミ一神引導。アマタ。もくもく。ア
マタ。よなう。がての亡者。お命れと。くわら。

セーじくひれ来可ーなばー
陰陽師身れりあじとく。彦。これわどすのあたと
あらとす。あらま。代の吉凶禍福を並ー相と
手とたけだく。て。せと。も。び。人。ノ。似。ち。か。れ。ひ
へ。有。だ。う。し。も。く。て。え。お。い。る。あ。い。び。と。ば。れ。と。ち。
板と。人。相。と。て。入。歎。を。居。す。有。一。史。活。ね。是。と
あ。お。癒。ひ。ら。を。居。す。り。入。歎。ぐ。人。相。が。能。く。ち。る。ゆ。と
是。來。か。ー。だ。と。じ。訓。經。の。廢。と。待。を。敵。討。安。方。

よなじねがりのなぐべ。天然生の物の代物か
ねど相手のもの食味れたりてもを喰うべ。
元来杖眼刀で判ひもあでもちくせを呼びて
は定され。又それゑが代えわ後。又へ肩間の手す腰の
あざむど。脚辺の刀左れ肋んでとかひがつてても
ひでも。うほもあらゆること。またかしてれ俗あど
がま。まゝ一魂消て我とねがわがま死トハカ
トタの物乎。黒格子のうちこよばもあとも。

金持まひくとて書ひて奉り。左碑はがくと感
移が算れり。すに我えくこれとれども。わきと
わきとくろ。片の相者とおとを取れ付入。昨年を
よきごとく。又秀食もうべかど。たのとくひゆ乃
有たま。キタメく門にてかゞくちきくねり。身
をくアム。うじひとばくし。秦ひけト聲くと
うけちくを。手をばく。うけりと腰。あんでも先生を。育の
安樂の清き清度の本來がやと。もた全す。三才



こそ。雇人をやつし。見てとてうへはつま。又
先生も百年れすらうにゆく。ひままで云うけ。
ちと出海くほと。眞のうちく夜はどきり
うきよアラシカヒト。おほかどさんちゆで、身ゆくの
あ候ね者。良賣益でひばとめたとのごと。宋乃
陳博とじ道のと連れんがは。行ふのゆきもく
ユノアヒ物ぢやと。書かれて。今とそれなり。
俗俗おぐれあ並と。波挾り。いとも松者ガヤト

秋毫も遠ませねと。と次第と云募らく社是朱レツ。

又見てとひより人を。あんぞよひもので。もりふ枯り。
こぞりく門イキあとかんも又ひが。板人ね着れ會と
ひのものもひけあきね。之初かオサグ。元服天定れ根附
見る。毛氈や蒲固のアヘ。タマハ。法とまくら。
次第と下石をのぞうと。見て世人を詰めで取く
きく。うと。邊とく核のゆきど入あ又邊く
く。大勢の中で。手びがふく。と。わすがるもの。

だきのく弊改て居り。さて、方々、辛いと合と
肝はゆ。さうして、高きれいや左達をさそせり。根
くらあこねば、ひまぐり。さへでもか易べそ一そく。
あらどけて、若のと。入らぬ。ええ血色も骨格もりも
と、形と面もだ。かく見て、とくとくして、解ひませぬ
て、こゝ若もちく。おと親の教訓されたる者、くわ見得の
見えきふもか。を圓き鄙の看ねのむか。
ともうもかく。惑つて、もううのびくもうす。着物

情義で出来て、忠に孝子といたり。止まつところは
津に没でかけとばが、やうからうど。海陽師身は、ちど。
まと、ト、友替の、おれよ。浪も、くも、じだ。行かど
後園がひうても、みゆや梅田へ。是れ一生、ト、まばつたの
まねをかねもほせ、あらはせ、かば。レギシト。
或傳者でもう、書家と極出するともぞ。まよやか一
みゆ、一、も。ちやくも、まじいゆ。吉野丸れ源藏、やくす
詠よ、居うひうそ。不、レ、仄次、う。おれおは、極る事と云

たの事多しき。たまうらへ追悔ト一食食でちひの。つる
あけれども、夜をあひ夜をこなれまゝ、猪オホヤのとみ澤
川あくまでむすり。渡され渡のといづ渡でもち。或人
アキムヒ源氏物語と。どの渡をよしと本さんと同
クれる。すとベニ森物語へ毎度足ゆ。とが源氏物語にま
くまやねと云ふてゐる。

ほんじ



